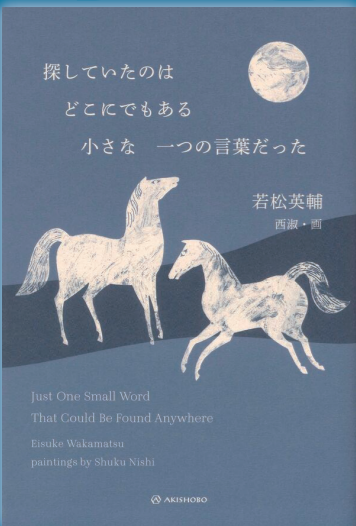


言葉はなるべく丁寧に用いた方がよい

『探していたのはどこにでもある 小さな一つの言葉だった』

若松 英輔・著 にししゆく 西 淑・画 出版社：亜紀書房 ISBN：978-4-7505-1857-2



批評家・随筆家の若松英輔さんが、古今東西の名著の言葉から、私たちが深く豊かに生きるためのヒントを教えてください。

読んで感じるのは、筆者の「ことば」に対する一種「祈り」のような想いです。スピードや効率、情報量、語彙の量、勝ち負け、損得、目立つことなどがもてはやされる今日ですが、そうではなく「ことば」を丁寧に扱うことの大切さを教えてください。

最初から最後まで一気に読んで本棚に陳列しておくのではなく、いつも自分のかたわらに置いておき、日々の暮らしの折々に開きたい「人生の伴走者」のような本です。

桶川市立中央図書館スタッフが選んだオススメ本「ことば特集」

『小川未明童話集』 小川 未明・著
出版社：新潮社(新潮文庫・刊) ISBN：978-4-10-110001-2
音読をお勧めします。美しい日本語の響きに心が浄化されます。

『今日は、お日柄もよく』 原田 マハ・著
出版社：徳間書店 ISBN：978-4-19-862985-4
言葉で成長するスピーチライターのお仕事小説です。

『翻訳できない世界のことば』 エラ・フランシス・サンダース・著
前田 まゆみ・訳
出版社：創元社 ISBN：978-4-422-70104-2
ことばの奥深さと楽しさを感じられる一冊です。

『ことばの食卓』 武田 百合子・著 野中 ユリ・画
出版社：作品社 ISBN：978-4-87893-107-9
昭和レトロな食べ物にまつわるエッセイ集です。不思議な読後感です。

『言語学者も知らない
謎な日本語』
研究者の父、大学生の娘に若者言葉を学ぶ
石黒 圭、石黒 愛・著
出版社：教育評論社 ISBN：978-4-86624-107-4
言語学者の父と娘たちの若者言葉に対する
解説が面白い1冊です。

テーマに沿った本を
図書館に
蔵書があるものから
選んでみました。
図書館を
是非ご利用ください。



OKEGAWA hon プラス+とは

OKEGAWA hon プラス+イベントスペースでは、OKEGAWA hon プラス+運営協議会（桶川市・株式会社新都市ライフホールディングス・丸善雄松堂株式会社）が主催して博物館、大学、出版社等と連携し、桶川の市民サービス向上のため、子ども向けから大人向けまで幅広い世代を対象とした学びのサポートをしています。

OKEGAWA hon プラス+でのイベントの予定についてはこちらをご覧ください▶



※QRコードは株式会社デンソーウェーブの登録商標です。



おけがわマイン 3F
〒363-0022 埼玉県桶川市若宮1-5-2
OKEGAWA hon プラス+
☎ 048-786-6353 桶川市立中央図書館
発行者：OKEGAWA hon プラス+運営協議会（桶川市・株式会社新都市ライフホールディングス・丸善雄松堂株式会社）
「202603」



OKEGAWA hon プラス+ 通信

No. **32**
不定期発行



テーマは ことばの本

読書離れが進んでいると言われますが日常生活でネットと関わる機会が増え、むしろ私たちが言葉に触れる機会は増えています。そしてそのあふれる言葉は軽くなっていませんか。単にその場限りの消費するものになっていませんか。

また、言葉はコミュニケーションの道具ですが、それを交換することによって、単なる事務的な情報の伝達に留まらず、お互いの感情を伝え、時に相手を慰めたり、時に悲しませたりします。特に昨今は人を追い詰める怖ろしい武器にもなっているようです。

ここに紹介している本の著者たちは、言葉への愛を持つとともに、その怖さを知っているからこそ、言葉について書くのでしょう。

是非、皆さんもこれらの本を通して、「ことば」について改めて考えてみませんか。



向坂くじらさんの定義することばたち



『ことばの観察』 さきさか 向坂くじら・著

出版社：NHK出版 ISBN：978-4-14-005754-4

詩人で国語教室ことば舎代表の向坂くじらさんが、ウェブマガジンで書いていたエッセイをまとめた本です。そのエッセイには、「毎回ひとつのことばを定義すること」というルールがあったので、この本では様々なことばが「定義」されています。

「定義」というと堅苦しいイメージがありますが、ご心配なく！向坂さんは、詩人としてのやり方であくまでも「日常」の中で「ことば」と向き合っています。私たちが普段何気なく使っているそれらが、向坂さんの「定義をめぐる試行錯誤の記録」を読むことで、違って見えてくることに驚きます。

それは私たちにとって、「ことば」との出会い直し、よりを戻す的な新たな関係づくりとも思えます。（それぞれの言葉についてくる向坂さんの詩もいいな）

なぜ向坂さんのこの本のタイトルや、ご自身が代表の国語教室名が「ことば」でなく、「ことば」なのか文中で明かされていますよ！

中央図書館に蔵書があります

再び過ちを起こさないために

『戦後80年 わたしは、この言葉を忘れない』

保阪 正康・著 出版社：日刊現代（発行）、講談社（発売） ISBN：978-4-06-540815-5



言葉にも、不幸な歴史がありました。昭和史の実証的研究において高い評価を受けてきた保阪さんが、戦後80年を迎えるにあたり、戦争の時代に使われて国民を呪縛した「用語」について、二度と復活させてはならないという思いを込めて書いた本です。

「非国民」、「玉砕」、「本土決戦」……。「言葉」が何度も何度も連呼され、日常的にそれを耳にしているうちに、それが当たり前になり、少しずつそれに異を唱えることはできない「空気」になってゆく（あのヒトラーの演説も、「言葉」を何度も連呼して聴衆を煽り、熱狂させてゆくのが印象的です）。

「言葉」には、使い方によっては、私たちに呪縛する怖ろしい力があるのです。それは、現在のソーシャルメディアの世界でも同様でしょう。このことは決して忘れてはなりません。

・中央図書館に蔵書があります

「ことばの違い」がわかる人へ

『三省堂国語辞典のひみつ』

飯間 浩明・著 出版社：三省堂 ISBN：978-4-385-36415-5



知りたい言葉をスマホに入力すれば、WEB上のページか、それをさらに要約した文言が出てきます。WEB上か電子辞書か紙の辞書か、という「媒体」に着目するのはひとまず分かりやすそうですが、本書は、辞書の「種類」の違いがこんなに面白いですよ、ということ辞書編纂者当人の視点で語っている本です。

このエッセイの著者・飯間浩明さんは、日夜、街に繰り出して野生の言葉を捕獲している珍しい職業。その「ことばハンター」なる様子は、三浦しをん『舟を編む』に触れたことがある方は、姿が重なって想像できるかもしれません。どうやら、辞書ごとの編集方針と「ことばハンター」たちの辞書観と熱量とが、それぞれの辞書の説明文を大きく異ならせているということが興味深く書かれています。

知らない言葉は、大人になってもまだまだあります。そもそも同じ言語を話す人々のなかにもこれからも生きていくことは、意味の変化や新語の誕生に出会いつづけることであり、辞書を引く行為に終わりはないでしょう。そんな私たちが、「辞書を選ぶ」という新しい楽しみを持つきっかけになる読書をお楽しみください。

・中央図書館、橘川図書館に蔵書があります

たくさんの言葉が響き合う「わたし」

『煌めくポリフォニー わたしの母語たち』

温 又柔・著 出版社：岩波書店 ISBN：978-4-00-061718-5



あなたの母語は何ですか、という質問に、アイデンティティが揺らく思いを経験してきた方がいます。そういった思いがどういうものを丁寧に思考しつづけた軌跡が記されたエッセイ。著者は、日本の小説家でもあり、日本語、中国語、台湾語を使うことのできる温又柔さんです。複数の言語を扱うマルチリンガルであると表現されたとき、多くの人々が持つのは、おおむね憧れのイメージであるかもしれません。それは、本人が学習で身に着けた高度な技術、あるいは多くの人には得がたい特別な暮らし方のなかで会得した素敵なものだという見方です。そのような前提の思い込みを、一度問い直す必要を提示してくれる本です。

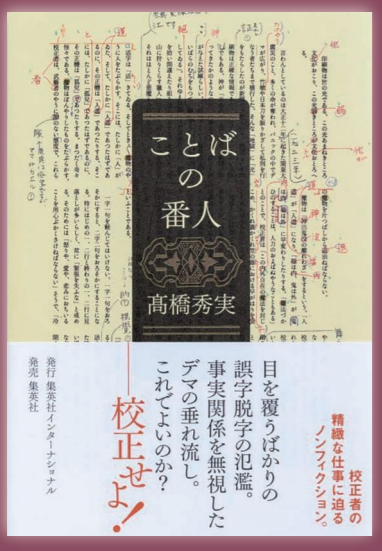
冒頭で触れたように、著者は、母語は何かと問われるたびに複雑な思いをし、いくつかの言語のはざまに揺れている自分の境遇を見つめていきます。例えばその会得環境の背景には、「台湾で生まれて、日本語を使わざるを得なかった」世代の、大切な祖父母がいること。日本語が母語だと迷いなく言える人たちは、それが意味する歴史のことを知り、境遇を想像しようとするのが、となりあう人々を悪意なく傷つけることをふせぐはずです。

ところで、この本のタイトルにある「ポリフォニー」という言葉をご存じですか。ポリフォニーとはふつうは音楽で使われる用語で、「多様な声が響き合いながら展開している状態」だそうです。既存の枠（「マルチリンガル」という言葉）を破るように選ばれた、素敵なことばづかいだと思いませんか。

—— 校正せよ

『ことばの番人』 高橋 秀実・著

出版社：集英社インターナショナル ISBN：978-4-7976-7451-4



ことばや文章の誤りを正す「校正者」。校正者のおかげで出版物は、より正しく、より分かりやすくなり、情報源として信頼がおけるものへ、あるいはことばの表現を健やかに味わえるものへと、質が高まっています。

しかし出版された本からはその仕事の跡は見えません。本書は、そんな影の立役者である「校正者」にスポットを当て、取材して書かれたルポルタージュです。現在も活躍する何人もの校正者の精緻な仕事ぶりやつましい

人柄がエピソードとともによく伝わります。しかも、取材した内容だけを分かりやすく伝えてくれるだけのものではないのです。取材側である著者の高橋秀実さん独自の体験や思索、歴史からひも解いた見解がふんだんに入っています。校正を語るために聖書や古事記や易経まで目配りし、ウィットゲンシュタインから本居宣長から著者の妻まで登場する本書には、校正というテーマでこんなにも広い視野からの切り口があるのかと驚かされました。読み物としてとても上質なノンフィクション作品です。